

# 防府市大崎遺跡における弥生時代中期の貝類資源利用

沖田 絵麻

## はじめに

遺跡から出土する貝殻や動物骨などの動物遺存体の研究は、人類と動物との関わりや、人類による動物資源利用を探る上で有効な手段のひとつである。なかでも貝類は、①海域・淡水域・陸域のいずれにも適応して棲息域が広く、②種類や棲息数が多く、③食用となる種類が多く、④簡単な道具があれば女性や子供でも採集可能、などの利点から人類にひろく利用されてきた。そのため、遺跡から出土する機会が多く、生業や動物性食糧を研究する資料として重要である。

本稿では、防府市大崎遺跡から出土した貝類遺存体のうち、未分析だった資料の分析結果を報告し、それをふまえて、大崎遺跡における貝類資源利用について若干の考察をおこなう。

## 1 大崎遺跡について<sup>1)</sup>

大崎遺跡は山口県防府市大字大崎に所在する(図1)。瀬戸内海を臨む防府平野の北側に位置する西目山(312 m)から南方へ張り出した支丘の1つである元山(77 m)の西斜面～尾根上に立地する、弥生時代中期の高地集落遺跡である。遺跡の標高は58～70 mで、周辺低地との比高差は約40～50 mである。遺跡の南東には佐波川が流れ、その周囲に低地が広がるが、中世以前にはその大部分が遠浅の内海であったと推定されている。大崎遺跡の周辺に立地する弥生時代の主な遺跡には、奥正権寺遺跡、下右田遺跡、井上山遺跡がある(図2)。

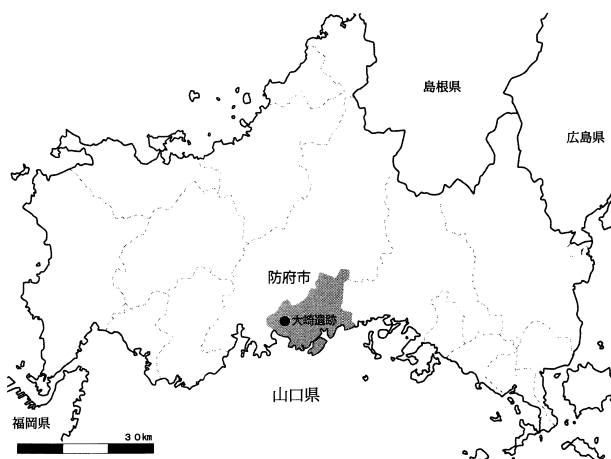


図1 防府市および大崎遺跡の位置

大崎遺跡では、県立中央病院建設工事に伴う緊急発掘調査が昭和55(1980)年に(末永・前田・乗安1982)、宅地開発に伴う本発掘調査が昭和59(1984)年に(山本・三戸田編1985)、いずれも山口県教育委員会によっておこなわれた。昭和55(1980)年の緊急発掘調査では、弥生時代中期後半頃の貯蔵穴とみられる袋状土壌11基の調査がおこなわれた。この調査では「付近からは食べかすとして棄てられた海産の貝類も出土」(末永・前田・乗安1982)したことが記されており、本来は「竪穴住居・土壇・貝塚からなる集落がこの地に営まれていた」(前掲)と推察されている。昭和59(1984)年の発掘調査では、5軒の竪穴住居跡、約30基の土壌(多くは貯蔵用竪穴)、環濠とみられる溝が検出され、環濠により区画された貯蔵穴群を持つ集落であることが明らかにされた。出土遺物には弥生時代中期の土器、石鎌や紡錘車などの石器のほか、大型植物遺体(炭化種子)や貝殻などがある。

貝類遺存体は昭和59年の発掘調査において7基の土壌から出土したが、中でもSK-1、SK-12、SK-14からは多量に出土したと報告される。SK-1出土の貝類遺存体については木下氏による詳細な同定結果の報告があり、ハマグリを主体とする貝類の種構成が明らかにされている（木下1985）。しかし、SK-12・SK-14については未分析であり、大崎遺跡における貝類資源利用を考える上では、これら未分析資料の分析が必要と考えた。

表1 大崎遺跡SK-12・SK-14出土貝類遺存体の同定結果一覧

遺構	分類	部位	L/R	部分	破損痕跡	被熱/色調	計測値 (mm)	備考
SK12 貝層土	腹足綱	ウミニナ	殻体	-	上半部	-	-	1点
SK12 貝層土	腹足綱	ウミニナ	殻体	-	下半部	-	-	2点
SK12 貝層土	腹足綱	フトヘナタリ	殻体	-	下半部	-	-	1点 殻口あり
SK12 貝層土	腹足綱	フトヘナタリ	殻体	-	中央部 破片	-	-	4点
SK12 貝層土	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻軸 破片	-	-	1点
SK12 貝層土	腹足綱	アカニシ	殻体	-	破片	-	-	4点
SK12 貝層土	腹足綱	種不明	殻体	-	破片	-	-	小片多数
SK12 貝層土	腹足綱	種不明 微小貝	殻体	-	破片	-	-	3点
SK12 貝層土	斧足綱	ハマグリ	殻体	L	ほぼ完全	-	L:55.5,H:47.1	1点
SK12 貝層土	斧足綱	ハマグリ	殻体	R	完全、殻頂部	-	1点焼(灰色) 完全殻 L:30.3,H:27.0	完全1点、殻頂部3点
SK12 貝層土	斧足綱	オキシジミ	殻体	L	ほぼ完全	-	L:47.2,H:49.6	1点
SK12 貝層土	掘足綱	ヤカドツノガイ	殻体	-	破片	-	焼(灰色)	3点 殻口は六角形
SK12 貝層土	軟体動物門	綱不明	殻体	?	破片	-	-	小片多数
SK12 貝層土	節足動物門	カニ類	指節	?	-	-	-	2点
SK14	腹足綱	オオタニシ	殻体	-	ほぼ完全	-	H:18.5~35±	5点
SK14	腹足綱	テングニシ?	殻体	-	殻軸 下半部	-	-	1点 比較的小型、現存高82
SK14	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	殻頂部あり	-	-	15点
SK14	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	殻頂部なし ほぼ完全	-	-	1点
SK14	腹足綱	ツメタガイ	殻体	-	破片	-	-	1点
SK14	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻頂部あり	-	完全に近い1点 H:83.7	6点
SK14	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻軸	-	-	5点
SK14	腹足綱	アカニシ	殻体	-	破片	-	-	2点
SK14 北半貝柱	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻頂部あり	-	-	3点
SK14 北半貝柱	腹足綱	アカニシ	殻体	-	破片	-	-	3点
SK14 北半貝柱	腹足綱	キセルガイ類?	殻体	-	ほぼ完全	-	-	1点 小型陸生貝類か。左巻き
SK14 北半貝柱	斧足綱	ハマグリ	殻体	L	殻頂部あり	-	-	1点
SK14 北半貝柱	斧足綱	ハマグリ	殻体	R	殻頂部あり	-	-	2点
SK14 北半貝柱	斧足綱	ハマグリ	殻体	?	破片	-	-	破片多数
SK14 北半貝柱	斧足綱	マテガイ	殻体	L	殻頂部あり	-	-	59点
SK14 北半貝柱	斧足綱	マテガイ	殻体	R	殻頂部あり	-	-	60点
SK14 北半貝柱	斧足綱	マテガイ	殻体	?	破片	-	-	破片多数
SK14 北半貝柱	軟体動物門	綱不明	殻体	?	破片	-	-	破片多数
SK14 北半貝柱	ウニ綱	ウニ類	殻体	-	殻片	-	-	3点
SK14 北半貝柱	ウニ綱	ウニ類	殻体	-	棘片	-	-	3点
SK14 北半巻貝	腹足綱	カワニナ	殻体	-	下半部	-	-	1点
SK14 北半巻貝	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻頂部あり	-	-	14点
SK14 北半巻貝	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻頂部なし 殻軸上半部	-	-	2点
SK14 北半巻貝	腹足綱	アカニシ	殻体	-	殻軸破片	-	-	8点
SK14 北半巻貝	腹足綱	アカニシ	殻体	-	破片	-	-	4点
SK14 北半巻貝	二枚貝綱	マルスダレガイ目	殻体	R	破片	-	-	1点 マルスダレガイ科か

表 2 大崎遺跡から出土した貝類の分類名と生態（奥谷 2000、波部・小菅 1967 より）

綱	目	科	属・種	学名	分布・生態
腹足綱	古腹足目	ミミガイ科	アフビ類	<i>Haliotis (Nardotis) sp.</i>	海水、岩礁。
	"	ニシキウズガイ科	ヘソアキクボガイ	<i>Chlorostoma turbinatum</i>	北海道南部以南～九州。潮間帯～水深20mの岩礁。
	"	"	イシダタミ	<i>Monodonta labio form confusa</i>	北海道南部以南～九州。潮間帯岩礁。
	"	サザエ科	スガイ	<i>Turbo (Lunella) cornatus coreensis</i>	北海道南部～九州南部。潮間帯岩礁。
原始紐舌目	タニシ科	タニシ類		<i>Vivipariidae</i>	淡水。
	"	オオタニシ		<i>Cipangopaludina japonica</i>	本州～九州の田や湖沼。
盤足目	カワニナ科	カワニナ		<i>Cemismulcospira bensoni</i>	日本全国の淡水、砂底や小石底。
	ウミニナ科	ウミニナ		<i>Batillaria multiformis</i>	北海道南部から九州までの日本各地。大きな湾の干潟、潮間帯の泥底上。
	フトヘナタリ科	フトヘナタリ		<i>Cerithidea (Cerithidea) rhizophorarum</i>	東京湾以南、西太平洋。内湾の潮間帯、アシ原やマングローブ林の泥上。
	タマガイ科	ツメタガイ		<i>Glossaulax didyma</i>	北海道南部以南、インド・西太平洋。潮間帯～水深50mの細砂底。
	トウカムリ科	ウラシマガイ		<i>Semicassis bisulcata persimilis</i>	房総半島以南の水深50～100mの砂底。
	アッキガイ科	アカニシ		<i>Rapana venosa</i>	北海道南部から台湾、中国沿岸。水深30m以浅の砂泥底。
	"	レイシガイ		<i>Thais (Reishia) bronni</i>	北海道南部、男鹿半島以南。潮間帯～潮下帯岩礁。
新腹足目	テングニシ科	テングニシ?		<i>Melongenidae sp.?</i>	テングニシ：房総半島以南、熱帯インド・太平洋の水深10～50mの砂底。
	"	キセルガイ科?	キセルガイ類?	<i>Clausiliidae ?</i>	陸生。
堀足綱	ソウゲツノガイ目	ソウゲツノガイ科	ヤカドツノガイ	<i>Dentalium (Paradentalium) octangulatum</i>	北海道南部以南、熱帯インド・西太平洋域に広く分布。潮間帯下部から水深約100mまでの細砂底。
斧足綱	フネガイ目	フネガイ科	サルボウガイ	<i>Scapharca kagoshimensis</i>	東京湾から有明海、沿海州南部から韓国、黄海、南シナ海。潮間帯上部から水深20mの砂泥底。
	イガイ目	イガイ科	イガイ	<i>Mytilus coruscus</i>	北海道～九州の潮間帯から水深20mの岩礁。
	カキ目	ベッコウガキ科	カキツバタ類	<i>Gryphaeidae</i>	カキツバタ：房総半島以南の熱帯西太平洋。水深20m以浅の岩礁底。
	マルスタレガイ目	バカガイ科	シオフキ	<i>Macra veneriformis</i>	宮城県以南、四国、九州、沿海州南部から朝鮮半島、中国大陸沿岸の潮間帯下部～水深20mの砂泥底。
	"	マテガイ科	マテガイ	<i>Solen strictus</i>	北海道南西部から九州、朝鮮半島、中国大陸沿岸。潮間帯中部の砂底に深く潜る。
	"	マルスタレガイ科	カガミガイ	<i>Phacosoma japonicum</i>	北海道南西部から九州、朝鮮半島、中国大陸南岸。潮間帯下部から水深60mの細砂底。
	"	"	ハマグリ	<i>Meretrix lusoria</i>	北海道南部から九州。潮間帯下部から水深20mの内湾の砂泥底。
	"	"	オキシジミ	<i>Cyclina sinensis</i>	房総半島から九州、朝鮮半島、中国大陸南岸。潮間帯下部から水深20mの砂泥底。
	オオノガイ目	オオノガイ科	オオノガイ	<i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i>	北海道から九州、朝鮮半島、中国大陸北東岸。潮間帯の砂泥底に深く潜っている。

対象資料の出土遺構である S K -1・S K -12・S K -14 は、いずれも丘陵頂上部を囲むようにめぐる溝跡 SD よりも下位に位置する、断面が袋状を呈する貯蔵用竪穴である。S K -1 は床面径 196×173 cm、深さ 125 cm で、最下層の 6 層中に多量の貝殻が含まれていた。S K -12 は 5 基の土坑が切り合う中の 1 基で、床面から多数の稲穂が検出された S K -9 に切られる。床面径 189×184 cm、深さ 205 cm で、中位の 10・11 層から多量の貝殻が層をなして出土したとされる。S K -14 は床面径 194×189 cm、深さ 205 cm で、下位の 8～10 層が円錐状に盛り上がって堆積した上に貝層が検出されている。いずれの遺構も、貯蔵穴としての機能を失った後に投棄坑として利用されたと推定されている。

## 2 資料

山口県埋蔵文化財センターに保管されている大崎遺跡出土遺物のうち、貝類遺存体の全て（ミカンコンテナ 8 箱）を借用させていただき、人類学ミュージアムにて作業をおこなった。

全資料中から S K -1 以外の遺構出土貝類遺存体を抽出した結果、S K -1 と出土遺構不明のものを除くと、S K -12 出土資料が 1 袋、S K -14 出土資料が 3 袋であった。この合計 4 袋について、貝類遺存体の種同定と個体数算出をおこなう。

## 3 分析方法

資料は複数種の貝が砂と共に混在することから、未整理の状態であると判断された。微小遺存体も検出できるように茶漉し（メッシュサイズ 0.5 mm 以下）を用いて乾燥状態での篩選別をおこない、砂から遺存体を抽出した。

表3 貝類遺存体の遺構別出土破片数と最小個体数

網名	分類名	SK1 (木下1985)			SK12				SK14			
		MNI*1	L	R	MNI	L	R	破片	MNI	L	R	破片
腹足綱	アワビ類	1										
	ヘソアキクボガイ	53										
	スガイ	238										
	イシダタミ	2										
	タニシ類	189										
	オオタニシ								5			
	カワニナ	1067							1*2			
	ウミニナ	460				1		2				
	フトヘナタリ					1*2		4				
	ツメタガイ	19							16			1
	ウラシマガイ	1										
	アカニシ	44				1		5	23			24
	レイシガイ	1										
	テングニシ?								1			1
	キセルガイ類?								1			
	種不明微小貝					1		3				
種不明								+				
掘足綱	ヤカドツノガイ				1		3					
斧足綱	サルボオ	3	3	3								
(二枚貝綱)	イガイ	1	1	1								
	カキツバタ類	5	5	5								
	シオフキ	36	29	36								
	マテガイ	55	51	55					60	59	60	+
	カガミガイ	219	205	219								
	ハマグリ	2147	2124	2147	4	1	4		2	1	2	+
	オキシジミ	191	191	179	1	1						
	オオノガイ	2	1	2								
	種不明											+
ウニ類											6	
カニ類							2					

\*1 最小個体数. 基本的に殻頂部の残るものをカウントした

\*2 殻頂部が欠けていることが通常なため、殻口部が残るものをカウントした

破片欄の+は、カウントしていない多数の破片の存在を示す

表4 各遺構から出土した貝類の棲息環境

棲息域	地理的位置	分類	分類名	SK1	SK12	SK14
沿岸水	湾外	沿岸砂泥底群集	ウラシマガイ	△		
			テングニシ?			△
		外海岩礁底群集	アワビ類	△		
			ヘソアキクボガイ	○		
内湾水・沿岸水	波食台・岩礁	内湾岩礁底群集・外海岩礁底群集	イガイ	△		
			スガイ	◎		
			イシダタミ	△		
			レイシガイ	△		
内湾水	湾中央部	内湾砂底域群集	サルボウガイ	△		
			シオフキ	△		
			マテガイ	○		○
			カガミガイ	◎		
			ハマグリ	●●	△	△
			アカニシ	△	△	△
	湾奥部・湾中央部	内湾泥底域群集	ヤカドツノガイ		△	
			カキツバタ類	△		
		内湾岩礁底群集・内湾砂礫底群集	ウミニナ	◎	△	
			ツメタガイ	△		△
湾奥部	干潟群集	オオノガイ	△			
		フトヘナタリ		△		
		オキシジミ	◎	△		
		タニシ類	◎			
淡水	河川上・中流, 湖沼	河川湖沼域群集	オオタニシ			△
			カワニナ	●		△
			キセルガイ類?			△
陸地	丘陵～平野	森林域群集				

最小個体数△1~49 ○50~99 ◎100~999 ●1000~1999 ●●2000以上

抽出した遺存体の種同定は、現生貝殻標本と貝類図鑑によった。個体数の算出は、基本的に殻頂部の残存する個体の数とするが、一部の巻貝類では殻口部残存の個体をカウントした。二枚貝類の場合は殻頂部の残存するものを左殻と右殻に分類してカウントし、多い方を最小個体数とした。

#### 4 結果

S K -12・S K -14 出土貝類遺存体の同定結果は表 1 に示す通りである。12 種類の貝類と、ウニ類、カニ類を同定した。S K -12 出土資料は種類数・個体数ともに少ない。S K -14 出土資料には多種の貝が含まれるが、中でもマテガイの出土量が多い。

すでに報告されている S K -1 出土資料中に含まれず、今回新たに確認された種類は、オオタニシ、フトヘナタリ、テングニシ?、キセルガイ類?、ヤカドツノガイであるが、いずれも少量であり、SK-1 の分析結果と大きく相違するものではなかった。なお、今回同定したタニシ科は全てオオタニシであったことから、S K -1 出土資料中のタニシ類もオオタニシの可能性があるとみて、以降の考察ではオオタニシとして論じる。

S K -1 出土貝類も含めた大崎遺跡出土貝類の分類名と生態を表 2 に示す。現時点で、24 種類の貝類の出土が明らかになった。なお、S K -1 からはムラサキウニが、S K -12・S K -14 からはウニ類 (Echinoidea) とカニ類 (Decapoda) が出土しているが、今回の分析では言及しないため表 2 には表示していない。

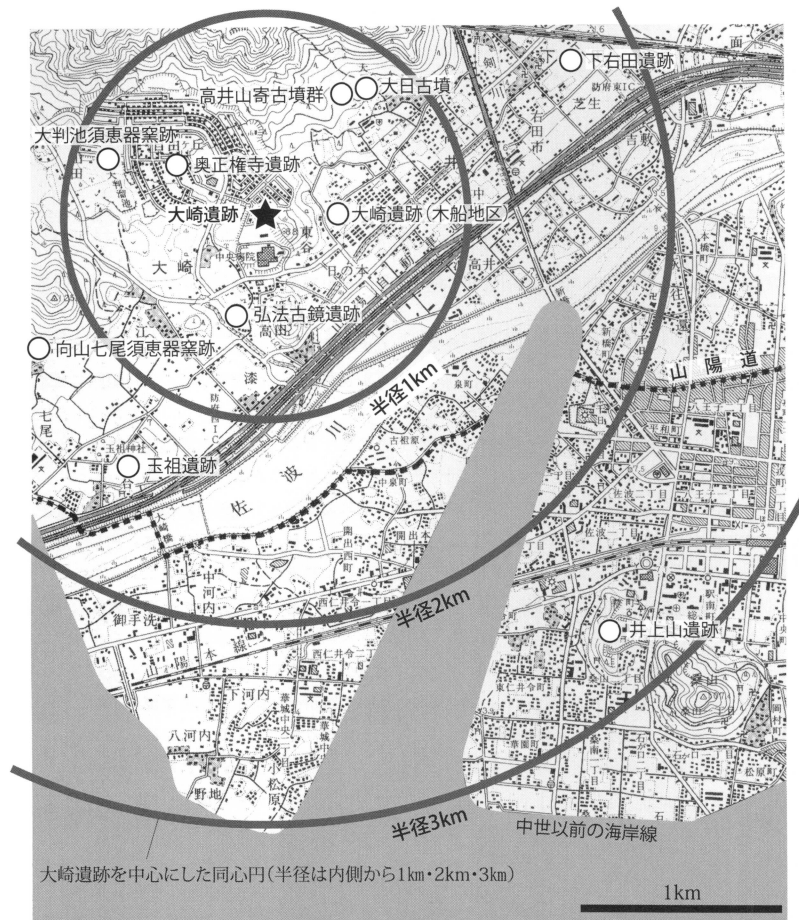
なお、S K -12・S K -14 出土貝類については、今回同定した 4 袋が出土した資料の全量ではない可能性があることを記しておく。特に、S K -12 出土貝類は 1 袋しか確認できず、報告書中の「大量の貝が層をなして出土した」(山本・三戸田編 1985) という記述に照らせば、未確認の資料が存在する可能性が高い。借用した資料中には出土遺構不明の袋もあったため、今後そうした資料の帰属が明らかになれば、ここで報じた貝類組成などに変更が生じることが予想される。

#### 5 考察

ここからは S K -1 出土貝類遺存体の分析結果も踏まえて、大崎遺跡における貝類資源利用について考えたい。

貝類の出土遺構別の破片数・最小個体数を表 3 に示す。全体を概観すると、種類数・個体数の多さで S K -1 が際立つ。その S K -1 出土資料ではハマグリが群を抜いて多く、カワニナ、ウミニナ、スガイと続く。今回分析した S K -12・S K -14 と比較すると、3 基の遺構に共通して出土する種類はアカニシとハマグリである。

出土貝類を、より細かい棲息環境でみてゆきたい。表 4 は富岡 (1999) を参考にして、貝類を棲息環境によって分類したものである。S K -1 出土資料を見ると、内湾の湾奥～湾中央部、湾外の岩礁域、さらに河川湖沼まで幅広く貝類資源の獲得場所であったことを示している。一方 S K -12 出土資料は内湾の湾奥～湾中央部から得られる貝類のみで、S K -14 出土資料は内湾の湾奥～湾中央部と河川湖沼から得られる貝類である。このような遺構による貝類資源獲得場所の違いについては、時期差、季節差、廃棄した人間の違いなど様々考えられるが、検討材料が不足しているため言及は避けたい。



西田編(2001)の第1図を基に加筆して作成

図2 大崎遺跡周辺遺跡と中世以前の推定海岸線

次に、実際の貝類資源獲得場所について考えてみたい。大崎遺跡と現在の海岸線からの直線距離は約6kmであるが、中世以前の海岸線は現在より内陸にはいりこんでいたと推定されており、遺跡から約2kmの距離に内湾が広がっていたとみられる(図2)。現在より内陸に位置した佐波川の河口付近にはアシ原や干潟が存在し、ウミニナやフトヘナタリを獲得できたと考えられる。湾奥では、引き潮の時期にはハマグリ、カガミガイ、マテガイなどが多量に獲得できたであろう。また、河川湖沼域群集のカワニナやオオタニシは、佐波川やそれから派生する小河川・水路で採取可能である。湾口付近には、外海岩礁群集のヘソアキクボガイが棲息する場所があったことも想定される。こうした環境は大崎遺跡を中心にした3kmの円の中に収まる。採集場所までの移動距離が短く、採取方法の面でも磯ノミなどの特別な道具を必要とせず、入手しやすい動物性タンパク源として重視されていたとみられる。

なお、SK-9の床面に5~10cmの層を成して炭化した穂刈りの稲穂が出土していたことから、大崎遺跡の人々は稲作を主要な生業の1つとしていたことが明らかである。しかし、米以外にもクヌギ、コナラ、ツブラジイが出土しており、稲作をおこないながらも多様な食材を利用していた。また大崎遺跡では、土鍾の出土からは沿岸での漁撈、石鏃の出土からは陸獣狩猟をおこなっていた可能性が高く、野山や海洋での動物資源の獲得にも積極的であったとみられる。このように、稲作に加えて堅果類、貝類、魚類など多種類の食材を利用している点は、下関市の綾羅木郷遺跡における生業形

態（沖田 2008）と類似している。綾羅木郷遺跡でも多量の貝類が出土しているが、沿岸漁労や陸獣狩猟によって魚類・獣類も利用しており、これらが不足する場合に補完できる日常的な動物質食料として貝類が重要であったと考えられる。大崎遺跡では、動物遺存体については貝類しか出土していないため、動物資源利用の実態解明については、魚骨や鳥獣骨の出土が待たれる。

## おわりに

大崎遺跡の貯蔵用竪穴に廃棄された貝類遺存体のうち、未報告資料を分析し、大崎遺跡の弥生時代中期の人々が利用した貝類の種類を補足した。また、貝類の採集場所についての予想を得た。今後は同地域における時期の異なる遺跡との比較や、他地域の同時期遺跡との比較をおこない、地理的・時期的な変化を探ることが必要であるが、残念ながら動物遺存体の出土している遺跡は少ない。

山口県は動物遺存体の保存に適した土壌環境が少なく、動物遺存体の出土事例は多くない。しかし、三方を異なる海域に囲まれ、緩やかながら地形変化に富む内陸には中～小規模の河川が多く流れる環境を有し、そこに暮らした人々による動物資源の利用状況もまた地域の特色を濃く反映したものであることが予想される。こうした地域性を明らかにしてゆくためには基礎資料の蓄積が必要であり、今後も分析未了の動物遺存体があれば資料化してゆきたいと考えている。

## 註

1) 大崎遺跡に関する記述は報告書（末永・前田・乗安 1982、山本・三戸田 1985）に基づく。

## 謝辞

分析資料の借用にあたり山口県埋蔵文化財センターの皆様にお世話になりました。また、遺存体の写真撮影は人類学ミュージアムの河田聡氏にお願いしました。感謝申し上げます。

## 引用文献

- 奥谷喬司編 2000 『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会。  
沖田絵麻 2008 「山口県の響灘沿岸地域における弥生時代前半の生業—下関市綾羅木郷遺跡出土動物遺存体の分析を中心として—」『研究紀要 第12号』下関市立考古博物館：1-16。  
木下尚子 1985 「5 大崎遺跡SK-1の自然遺物」『奥正権寺遺跡Ⅱ 大崎岡古墳群 大崎遺跡』山口県教育委員会，山陽都市開発株式会社：163-164。  
末永博憲・前田耕次・乗安和二三 1982 「埋蔵文化財の記録（1）大崎遺跡—防府市大崎東谷—」『山口県文化財 第12号』山口県文化財愛護協会：52-59。  
富岡直人 1999 「第6章 貝類」『考古学と自然科学2 考古学と動物学』同成社：89-117。  
西田宏編 2001 『大崎遺跡（木船地区）』山口県埋蔵文化財センター。  
波部忠重・小菅貞男 1967 『標準原色図鑑全集 第3巻 貝』保育社。  
山本源太郎・三戸田晃司編 1985 『奥正権寺遺跡Ⅱ 大崎岡古墳群 大崎遺跡』山口県教育委員会，山陽都市開発株式会社。



ウミニナ



フトヘナタリ



微小巻貝類 (種類不明)



ヤカドツノガイ



ハマグリ 左殻



ハマグリ 右殻



オキシジミ 左殻



カニ類

スケール 1目盛=1mm

写真1 大崎遺跡SK-12出土貝類遺存体ほか





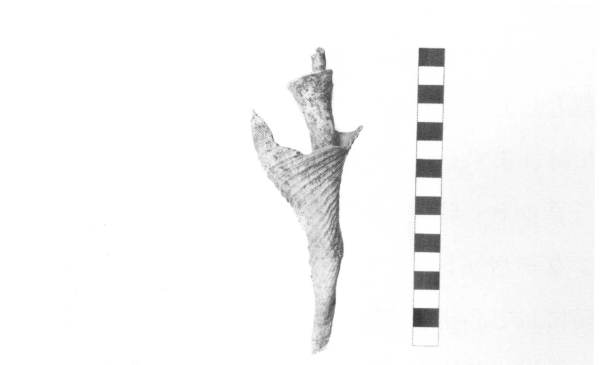
オオタニシ



ツメタガイ



アカニシ



テングニシ?



マテガイ 左殻



マテガイ 右殻



ウニ類

スケール 1目盛=1cm  
\*ウニ類のみ1目盛=1mm

写真2 大崎遺跡SK-14 出土貝類遺存体ほか

---

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

## 研究紀要

第11号

発行年月日 2016年3月  
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム  
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上891-8  
TEL 083-788-1841  
FAX 083-788-1843  
印刷 アロー印刷株式会社  
〒751-0818 下関市卸新町10-3  
TEL 083-223-1211  
FAX 083-223-1309

---